黒埼町の今昔

町史編さん課

木場満行寺への学童疎開（六）

昭和二十年三月、六年生は卒業式のため帰京するが、東京大空襲に遭うことに。

◆卒業式のため六年生が帰京

熊ノ森から20人が満行寺へ

昭和二十年三月、木場満行寺の疎開学童六十二人のうち、六年生二十人が母校で卒業式を挙げるため、帰京した。その月の欠員の補充として、その月の末ごろ、西蒲原郡島上村（今は分水町）熊ノ森の勝誓寺から、同じ川南国民学校の疎開学童二十人が満行寺へやって来た。内訳は三年生七人、四年生七人、五年生六人であった。

その中に、古晒偉子さん（当時五年生、現住所・足立区綾瀬）がいた。

その古晒さんからの手紙を一部、ここに紹介する。

「二十年三月、六年生が帰京した後の満行寺へ、合併整理として私たちが参りました。そしてそれから終戦までの約四か月間を満行寺ですごさせていただきましたが、四十五年たった今、黒埼の思い出として印象に残っているのは、駅からお寺へ行く途中の土手の桜並木の美しさと、天然ガスを惜しげなく出してやわらかく下煮したおいしい大豆の入った御飯のこと、空襲してきた米軍機が砲撃されて火の玉になって落ちてくるのを夜中の畑でランドセルをかかえながら見ていたことなどです。地元のかたとの交流の記憶がおぼろなのは、四月、五月の農繁期の休みと、夏休みの間の短い期間のおつきあいだったせいと思います」

砲撃された米軍機をランドセルをかかえたまま、夜の畑の中で見る

疎開児童の大半は二十年八月、それぞれに家族が迎えに来て帰京したが、東京の家族が空襲に遭い、身寄りのなくなった子供たちやその他の事情で満行寺に残った約二十人の全員引き揚げが完了したのは昭和二十一年三月半ばごろだった。

◆ある疎開児童の手記

緑濃き山川、夏はお寺の裏を流れる堀での魚とり、あぜ道や八幡様の森や満行寺の庭での虫とりなど。冬は本堂の前にみんなで作った雪だるま、雪合戦やスキーもしました。

しかし疎開生活でこれら楽しかったことは昼間だけで、夜は母恋しさに布団の中にもぐって泣いていました。

なぜ、どうしてここにこうしていなければならないのだろう。やるせない夜を幾夜も過ごしました。恥ずかしながら〝おねしょ〟もたびたびしました。後年、これが欲求不満の現われと聞いた時はなるほどと思いました。

〝おねしょ〟をしても、気の強い私は朝起きても決してそれを口にしませんでした。お友達も父母恋しさに泣いていたのですから、人どころではなかったと思います。心がすさんで、お友達とよくけんかをしました。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の戦争の終りを告げる声を聞いた時、戦争に敗けたけれど、母に逢える喜びでいっぱいでした。そして一刻も早く東京に帰りたいと毎日のように言って先生を困らせました。しかし、やがて帰った東京は夢に描いたものとはほど遠く、荒涼とした焼野原でした。

◆帰京した六年生は東京大空襲に遭う

さて、二十年三月に母校で卒業式を挙げるため帰京した満行寺の疎開児童のうちの六年生二十人だが……

大仲幸子さん（現片山、現住所・上尾市）は仲良しの同級生・田中久子さんといっしょに新潟からの帰りの列車に乗り込んだ。

久子さんの顔色が悪く、震えているので、幸子さんが「寒いの」と聞くと久子さんは「寒くない」と答えた。

列車が動き出すと、久子さんが幸子さんにかじりつき「わたし東京に帰りたくない、怖いからいやだ」と言ったが、幸子さんが「今までたいした空襲もなかったらしいから、きっと大丈夫よ」と言ったら「うん」とうなずき、それから東京に着くまで話しかけてもほとんどしゃべらなかったという。

この時、久子さんは帰京して数日後のあの恐ろしい東京大空襲に遭うことをよかんしていたのかも知れなかった。その空襲で久子さんのほかにも多くの級友の消息がわからなくなった。

今思えば、六年生はなんのための疎開だったのかと悔やまれてなりません、と幸子さんは話している。

◆三十七年目に同窓会を計画

昭和五十六年の春、木場の五十嵐芳男さんや渡辺富雄さんら気の合う仲間数人の間で、呼び歳五十歳になるのを記念して、昭和十九年から二十年にかけての木場国民学校五年生の同級会をしようという話が持ち上がった。このとき、せっかくのことだから地元だけでなく、満行寺に疎開していた東京の同級生たちにも呼びかけて、一緒にやろうということになった。

しかし、戦後もすでに三十六年の歳月が流れ、かつての同級生はみな、五十路を越える初老となり、果たして遠く離れた東京から参加してくれるだろうかと危ぐするむきもあった。

しかし、五十嵐さんらの同級生で、木場新田の山際商店の次男の祥英さんが、学校を卒業するとすぐ横浜市内に就職して、東京の人たちと地元のパイプ役をしてくれていた。そして、同級生同士が手紙などによってかなりの交流があることも知っていた。

東京のまとめ役を、祥英さんを通じて中島道仁さんにお願いすることにし、さっそく連絡をとった。中島さんからの返答によれば「満行寺へ疎開した私たちの間に、今も学年を超越したつき合いがあり、そのため三年から六年生まで全員の同窓会ということであれば、喜んで出席させて欲しいが、五年生だけの同級会ということでは参加できない」ということだった。

返答を受けた発起人たちは相談の結果、その申し出を受け入れることにした。

執筆・宮田栄門

緒立路散策

緒立遺跡の歴史的意義と沈下の原因

布川　忠一

前回は緒立遺跡の発掘にまつわるエピソードを紹介したが、今回は緒立遺跡の歴史上の意義や遺跡がなぜ海抜下にあるかについての私見を述べてみたい。

◆中央文化の流入と緒立遺跡

越後一の宮・弥彦神社の祭神は天香山命（アメノカゴヤマノミコト）といい、またの名は高倉下命（タカクラジノミコト）という。神話によれば天照大神（アマテラスオオミカミ）の曾孫にあたり、天孫瓊々杵尊（ニニギノミコト）の降臨に供奉して、紀州の熊野に住み、尾張氏の祖となった神である。天香山命は、神武東征の時に霊剣〝師霊〟（フツノミタマ）を天皇に捧げて大功をたてられたという。そして、神武即位後は、勅命で越後の制圧と開拓、経営にあたったといわれている。

これらの神話は、越後が中央政権の統治下に入るとともに、人的交流と先進文化の流入があったことを意味しているものである。そして、その一端を、緒立遺跡が物語っているのではないかと思っている。

緒立遺跡発見のきっかけとなった古式土師器（昭和27年発見、常民文化史料館蔵）

というのは、緒立遺跡からの出土遺物の大半を占める古墳期の在来土器（土師器）中に、東海系の土器が混じることである。それまで人骨に穴をあけて何かに用いたり、成人の証として前歯を抜いたりそれらを契機として次第に発展の途をたどったのではなかろうか。

◆緒立遺跡の沈下

ところで、緒立遺跡がなぜ海抜以下のところにあるのだろうか。

実際に発掘に参加された人はうなずかれるだろうが、沖積の粘土とガッボの層を掘り抜くと、立派な砂山がマイナス三メートルくらいのところに出現するのである。

二千年以上も前の古代人が海抜以下の場所に住めるわけはなく、ましてや祭祉や墓地を営めるはずもなく、あきらかに当時はもっと標高が高かったと考えざるを得ない。

低くなったとすれば、その要因は二つあり、一つは地球の温暖化による海進現象で、もう一つは局部的な陥没が考えられる。

昭和五年、富山県魚津市の漁港近くで発見されて天然記念物に指定された魚津海底埋没林（樹齢二〇〇～五〇〇年の杉林がそのまま海面下にあるもの）は地盤の沈降による

と言われているし、また比較的近いところにフォッサ・マグナ（糸魚川～静岡を結ぶ地殻構造線）があることなどを考えると、海進や河川の影響が多少あったとしても、なお断層による沈降と思わざるを得ない。

そして貞観五年（西暦八六三年）、越後・越中（現在の富山県）に大地震があり、大勢の人が家の下敷きになって死んだとの古記録もある。また、筆者がかいま見た地元黒鳥部落の古歌集に「緒立の山や古典芸能の類いすら何一つ残されていないのは、やはりある時期、突然の地殻変動（地震）のため人々の生活の場が奪われて、極端な過疎の状態に置かれた結果だと考えたほうが的を射ていると思っている。

◆緒立に遺跡公園を

本年度の調査発掘が順調に終われば、小規模ながら公園予定地が残されると聞いている。

二千数百年の歴史を秘めた縄文の里緒立、北陸以北では例の少ない抜歯、加工人骨などの他に数多くの資料を誇る新設の資料館、謎の御神体を祀る豪華な社殿の緒立八幡宮、黒鳥兵衛伝説にからむ温泉と古墳、さらに新築予定の老人福祉センター（仮称）に加え、眺望のよい的場遺跡などをめぐる桜とあやめの遊歩道を整備して、地方有数の教養公園が一日も早く生まれることを願いながら小稿の筆をおく。

に登りてよめる歌」云々とあり、それが仮に白髪三千丈式の誇張と見ても、なおまだ往時は緒立八幡宮を中心に相当の標高を保っていたものと考えたい。

数多い湖沼のど真中、沖積平野の最先端、そして低い標高の砂丘上に営まれた稀有の円墳が、一六〇〇年もの間、沈黙を守っている現実はどんな解釈をしたらよいのだろうか。創建が古いと思われる緒立八幡宮もそうだが、これらに対する何の伝承も古事異録ではあったかもしれないが、した程度の生活様式が徐々に

昨年、緒立C遺跡から発掘された土器片

《参考資料》

刀匠黒鳥鍛冶について

三月号で黒鳥鍛冶についてふれたが、それについて補足したい。

弥彦神社に奉納された刃渡四尺七寸余（約一四〇センチ）、反り三寸余（約一〇センチ）の大太刀に「越後蒲原郡黒鳥住度富嫡屋當作」、反対側に「奉納主會津小川庄山百合村清野八太郎」の銘がある。黒鳥に住む度當の子の屋當という人物がこの刀を作ったという意味である。

『刀匠全集新刀編』（昭和九年初版）には「屋正、越後蒲原郡黒鳥住度正嫡屋正と切る、天明頃」とあり、二百年ほど前のものとわかる。（資料提供・鳥原新地　飯田光男氏）

黒鳥五番組の本間秀雄、相田徳衛両氏の宅地を中心に多量の鉄滓が散見され、付近に鍛冶池の地名が残り、鍛冶池橋が現在も横江堀にかかっている。

（終わり）